

和良村分村開拓団・苦渋の道

岐阜県 玉田澄子

ソ連邦が崩壊してロシア共和国となり、そのロシア、中国、北朝鮮が共同で、日本海沿岸を開発しようとしている豆満江開発計画が、近頃、しばしば新聞やテレビで報道され、にわかには三國の国境三角地帯がクローズアップされてきた。この三角地帯の要の位置にある中国の琿春^{ハニョウ}に、かつて私の一家が入植していた満州和良村分村開拓団があった。

岐阜県拓友協会日中友好訪問団の一員として、私は昭和六十一年六月、吉林省、延辺朝鮮族自治州、琿春の旧開拓地を訪ねたので、豆満江周辺の人々の暮らしを、ニュースに重ねて思い出している。そして、さらに思いは四十七年前へと遡ってゆく。

昭和二十年八月、ソ連軍の侵攻、日本の敗戦によって、満州開拓団の人々の上に悲惨な日々が展開されて

いった。

敗戦当時七歳だった私にも、幻灯写真の種板のような残像が脳裏に刻みこまれている。昭和二十年代に、母がかなり詳細な体験記を書き残しているの、私は折りに触れてそれを読んできた。結婚して、二女の母となつた私は、あの状況の中で子供を護る母親の苦悩が実感として解るようになってきた。

私は昭和十三年三月十六日、父、大澤五三（明治三十八年生）母、きぬ（明治四十二年生）の長女として、岐阜県郡上郡和良村に生まれた。長良川の上流、奥美濃の盆踊りで有名な町、郡上八幡の東隣に位置する村である。兄、毅（昭和九年生）と後に妹、明子（昭和十七年生）がここで生まれている。

和良村では昭和十四年に国の指定を受けて分村による満州開拓団を送り出すことになった。当時村内で代書人をしていただいた私の父は、村当局から経理指導員として参画を懇請された。母は渡満に強く反対したのだが、時局柄父は拒むことができず、特に村民の間に父による信頼があつて、県の拓務課から指導を受け、早急

に分村開拓団を組織しなければならぬ村当局の苦しい立場が、産業組合理事でもある父には分かっている、受けざるを得なかったようである。父母は話し合いの末、開拓団の運営が軌道にのったら後任者に後事を託して退団するということで、父はひと先ず単身入植することになった。

県の拓務課が中心になって、郡上郡下の各村から集められた人々からなる視察団が派遣され、開拓地が検討された。琿春地区は、豆満江支流の琿春河流域で地の肥沃なところであり、朝鮮半島を経由して日本と交通の便もよいということで、満州国間島省琿春県崇札村（東満鉄道琿春駅東方十二キロ）に入植と決定。昭和十六年四月、父を含めた先遣隊十八人が渡満した。先遣隊は全員男子で、その年の秋になって隊員は家族を呼び寄せた。

和良村分村開拓団は目標を二百戸に置き、昭和二十五年五月まで数次にわたって村民を送り込んだが、太平洋戦争に突入して村民は兵役優先となり、適任者の不足をきたして、敗戦時八十一戸、三百四人にとどまっ

た。

琿春は関東軍の軍事拠点としても重要な地域だった。軍に必要な食糧などの納入も開拓団に課せられた大きな役目だったのである。

長白山脈の末に位置し、すでに清朝の末期から越境して住みついた朝鮮族によって水田が開発されていて、水質もよく、満州というイメージから少し異なる霧囲気を持った土地柄であった。他の満州開拓団同様、満州拓殖公社によってすでに買収された土地・家屋が開拓団の手に渡されたのであるが、買収そのものに現地住民の怨念のあったことを、開拓団民は敗戦後思い知らされたのである。

父を満州に送った母と兄、私、妹の四人は、同じ郡上郡内の牛道村（現白鳥町）にある母の生家に身を寄せて、父の帰りを待っていた。

ところが開拓団で何か不祥事があつたらしく、昭和十八年秋に団長、副団長が揃って退団し、そのあと団員たちから父が団長に推されてしまった。立場上家族を呼び寄せざるを得なくなった父の気持ちを察した母

は、一家を挙げて満州へ渡る覚悟をした。

満州に骨を埋めるつもりで、数年に亙る生活必需品を、厳しい物不足の中で精いっぱい用意した母。国民学校一年生に入学したばかりの私に、たった一枚だったが本裁ちの着物を用意してくれていたことを、私はいまでも、その着物の柄の橙色の柿の模様まで、鮮やかに思い出すことができる。

昭和十九年五月、迎えにきた父に連れられて、敦賀から船に乗り、朝鮮の羅津^{ろしん}で汽車に乗り替えた。北鮮線から東満線に入り、日本から最短距離で満州・琿春に着き、そこから馬車で開拓団へ向かった。

開拓地は琿春街から豆満江の支流の琿春河を渡って、ソ連国境へはわずかに十二キロの地点にあった。東にはソ満国境のなだらかな稜線が遠望される。目を転ずれば国境の豆満江の向こうに高い朝鮮の禿げ山が見える。こちらも国境まで十二キロという近さだった。

近くには岐阜県から高鷲^{たかす}開拓団、朝日^{あさひ}開拓団、他県からも開拓団や義勇隊開拓団が入植していた。

私たちが入居した家は以前は満州族のものだったよ

うで、周囲が土塀で囲まれていた。家の中央の土間の部分に板が張りわたされて、日本式の座敷に作り替えられていた。しかし、電気はなく、風呂はなく、未開の暮らしを余儀なくされて、三年ぶりに父と一緒に生活ができるという喜びがなければ、とうてい我慢のできるものではなかった。が、何事も、お国のために辛抱するのが当然という時代だったから、不平は言わなかった。

私の家では農地を持たず、父が開拓団の本部に毎日勤めていた。開拓団は入植年次によって第二部落まで広がっていた。私の家の側房には、開拓団の通訳兼小使いの朝鮮人が入っていた。

民家を改造した学校で、一年生から高等科までを二クラスに分けて教えていたが、団では新しい煉瓦づくりの学校を建設中だった。

この開拓団にも、昭和二十年の春ごろから、若い団員に現地召集がかかるようになり、この年の植え付けの季節には農業の規模を縮小しなければならぬほどの人手不足をきたした。それでも、新聞もラジオもな

い暮らしたから、日本の戦況は内地からの便りで知る以外はなく、(父は知っていたかもしれないが、立場上団員の動揺を考えて家族にも洩らさなかったのだらう)叔父たちの相次ぐ戦死の報せや日本各地の都市の空襲に母は心を痛めていたようだ。

団長の父に召集令状がきた。四十歳を超えており、近眼で内地での兵隊検査では乙種合格だった父に、よもやと思われる召集だった。しかもその時、母は四人目の子供をみごもっていて、出産予定日は八月九日である。父は身重の妻と、やがては四人となる子供、三百人の団員を残しての出征に、どんなにか心を残したことだろう。

七月二十二日、現地住民の動向を懸念してすでに秘密召集になっていたため、私と兄は何事もないように登校し、母と妹に見送られて、炎天の開拓道路に消えていったのが父の姿の最後になった。

「じゃ行ってくる。子供を頼んだよ」というのが無口な父の最後のことばだったという。

母は八月九日未明、予定どおり無事出産した。無事

とはいうものの、その前三日間、母は俗に満州赤痢といわれていた下痢をして寝込み、出征前の父から頼まれているといつて、父とは特に懇意な老女が世話をしにきてくれていた。

私と兄はその朝、ソ満国境から西に向かう二機の飛行機を見ている。尾翼に日の丸のないことに気がついて、子供の思考はそれがソ連軍の参戦と結びつかなかつた。

登校してすぐ、避難命令の出たことを知らされた。私の頭の中には産褥の母の姿があつた。どうするのだろう、うちはどうするのだろう、私の胸は不安で破れそうだ。唇をかみしめ、我が家に向かって懸命に走つた。

母はすでソ連参戦のことを知っていた。

開拓団本部に琿春警察から避難命令が伝達されたのは、九日午前八時頃だという。三日間の食糧を持参して十二時までに琿春橋を渡り終えるようにとの指示があつた。

開拓団民は日ソ不可侵条約を過大評価していた。そ

の上、世界に冠たる精銳関東軍と、こちらも過大に評価した。三日間の食糧持参という指示に、ソ連の侵入は一時的のものだという判断をした団本部では、当初、病人は避難せず本部員とともに待機するとの方針を打ち出していた。中心的な人間はほとんど出征し、迅速かつ適切な判断を下せる人物が揃っていなかったという事情もあろう。

母はよろよろと産褥から起き上がり、正座して、兄と私を膝近くに座らせた。

「先生について逃げなさい。明子と赤ん坊、(女の子だった)はお母さんと一緒に残り、いざという時は自害します」と兄に簞笥の上置きから懐剣を持ってこさせた。「もう会えないかもしれないが、大きくなったら国のため、天皇陛下の御為になる人になりなさい」といった。

手伝いにきていたおばさんが用意してくれたお握りや下着の着替えなどをリュックサックに入れて、隣のおばさんに連れられて門を出ようとするとき、一台の牛車が母を迎えにきてくれた。本部の方針が変わって

病人も一人残らず避難と決まったのだ。私は母と一緒に避難することになったのがうれしくて、はしゃいで母に叱られた。しかし、あの時のうれしさは、今あるこの生命の子感だったと思われる。

後事を側房に住む朝鮮人のKに託して、牛車に乗って出発したのだが、開拓団を出て十キロも行かないうちにその牛車を捨てなければならなかった。

琿春橋が黒煙を上げていたのだ。関東軍は私たちを置き去りにして、渡り終えた橋を向こう側から爆破して退却した。信じられない黒煙である。この琿春河を渡らなければ避難列車が待つ琿春駅には出られない。団の幹部は後始末に残って、女子供の引率は兵役前の青年たちに委ねられていて、予想外の出来事に彼らもうろたえている。生憎前夜は大雨が振って川幅はいつもの数倍になって濁流が渦巻いていた。

牛車に横たわっていた母はもう産婦ではいられなかった。牛車の荷物は全部あきらめ着のみ着のまま、ぐにやぐにやの赤ん坊を背中にくくりつけ、三つの妹を抱いたり歩かせたりしながら、人々の後について川岸

を上流へ、下流へ、渡船場を探して歩く。子供たちを叱りとばし、阿修羅の形相でみんなに遅れじと、妹を横抱きに私の手をつかみ、腰まで浸かる川を渡る母。真つ暗くなつてから、珥春駅に辿り着いた。

すでに無蓋車の上は人でいっぱい、四人も子供を連れた母は後ろに押されるばかりである。母の必死の哀願に手を貸してくれる人があつて、ようやく満杯の貨車に乗ることができた。ここで母は初めて赤ん坊に初乳を与えたと書き残している。

空襲を避けながら二昼夜かかつて、間島省の省都、延吉に逃れた。間島在満国民学校が避難所に充てられた。私たちは音楽室を宛がわれ、母はグラランドピアノの下に支給された毛布を敷いて三日振りに横になることができた。白いお握りが配られてようやく人心地がついた。間島省各地の開拓団から続々と避難民が集まり、たちまち学校は廊下や階段の踊り場まで人で溢れた。関東軍の巻返しを願っているのに、持ち込まれる情報は、ソ連軍の空襲や日ソ激戦地での関東軍の苦戦ばかりである。やがて、満州拓殖公社が物資の放出を

始めた。着のみのままの避難民はいくらか物を手にすることができてうれしいが、それはそれで形勢不利なのかという憶測のもとともなつて、不安は倍増されていく。

八月十六日に十八歳以上四十五歳未満の男子全員に召集が入った。いよいよ反撃かと期待したが、翌日彼らが全員泣きながら戻ってきた。そこで初めて、すでに二日前に日本は無条件降伏したことを知らされたのである。敗戦もショックながら、全国民に天皇陛下から直接その旨のお言葉があつたというのに、お国のために国策に沿つて満州開拓に勤しんでいた日本人には、何の沙汰もなかつたということも大きな衝撃だつた。

パニックに陥つた難民収容所は新たな恐怖に静まり返つた。日本の敗戦が現地の人たちに伝わつたのだから、校庭に旗を押し立てた人たちが口々に歓声をあげて集まりだした。この時点で初めて、自分たち日本人が彼らにとつてどんな存在であつたのかを認識させられたのである。現地住民と融和を図り、彼らの国土

の開発に、はるばる日本から来てやっているというようなつもりでいた私たち。現地の人たちも、優秀な日本人の協力を得られて感謝していると、常日頃の彼らの態度から信じて疑わなかった日本人たちの思い上がり（日本国崩壊）は鮮やかに思い知らせてくれたのである。

ソ連軍の戦車を連ねての進駐。掠奪、婦女暴行の中で、ひたすら無事を祈るしか術のない日々。支給されるのは一日にわずかなコーリヤンの握り飯。下痢や栄養不良で病人が続出する。市街地の邦人までが治安の悪さにたまりかねて学校へ身を寄せるようになった。

九月に入るとこの学校からの退去命令がでた。どこへ行けばよいのかまったく当てはない。止むなく、もとの開拓地を目指すことになった。病人や女子供の集団が、野宿をしながら百三十キロを歩くのである。産後の母が四人の子供を連れて果たして歩き通せるか。不安は尽きないが、開拓団については、何事も本部までで手元に現金を持っていなかった母は町に残ることもできず一団に従うより方策がなかった。

残暑の厳しい中を、落後者となることを恐れて必死に歩く。赤ん坊を兄の背に、三つの妹は母の背に、支給された十日分のコーリヤンと水筒がわりの一升瓶をさげて、もうもうとした土埃にまみれて、難民の群れは延々長蛇と続く。ソ連兵や現地住民の掠奪に合い、強姦の悲鳴をきいて恐怖の野宿がつづく。秋雨に濡れて冷えきった体を寄せ合って明かした夜もある。国策で送り込まれた開拓団民は、その祖国に棄てられ、ただ一固まりになっていることで辛うじて生命が保たれているに過ぎない。

兄の背にくくりつけられた赤ん坊の顔は、ままごとの人形のような大きさで、泣き声もか細い。母の乳房をくわえてみても、吸う力もないのか乳が出ないのか、直ぐに口から乳房を放してしまう。休憩地では「まだ死なんのか、赤ん坊は」と、まるで早い死が望まれるようなことが囁かれた。私は眠りながら歩いていて、母から頬をひっぱたかれた。

「置いて行かれたら死ぬんだよ。足が痛くても、ついて行かなきゃ死ぬんだよ」

母は呪文のように同じことばを吐き続けた。子供に言い聞かせるよりも、自分自身のために必要だったにちがいない。

十一日間歩き続けて、ようやく陣春街まで辿り着いたものの、それ以上進むことができなかった。開拓地に残してきた日本人の所有物の一切が、現地住民に掠奪されていて、それを取り返されては一大事と、彼らは日本人の帰団を恐れているという。無理に進めば命までもが奪われかねないというのだ。日本人をいか所に収容し、朝鮮人青年同盟なる組織が監視し、許可なく収容所を出た者は銃殺するという。

掠奪され尽くした土の床と壁、屋根だけを残したホテルと数棟の警察官官舎が難民収容所とされた。七畳ほどの一部屋に三家族十五人が割り当てられた。窓や出入口の扉などは持ち去られて穴が開いたままだ。物騒この上もない。拾い集めた板ぎれと古釘を石で打ち付ける。まるでままごのようなやり方で応急処置をしなければ、寝るわけにもいかない。しかし、野宿を十日も続けてきた私たちは、雨露がしのげるだけでも

ありがたいと思えるようになっていた。

ここでもソ連兵による掠奪や強姦が頻発し、無抵抗に徹して生きなければならぬ日本人は、ただひたすら自身に及ばぬように祈るしか術がない。私たちの部屋に踏み込んだのも再三だったが、母は熱病人を装って難を逃れた。しかし、幾度女の悲鳴を聞いたことであらう。七つの子供が強姦の何たるかを知ったということは、地獄に他ならない。

日本の在満物資を本国へ移送するソ連軍からの徴用で開拓団からは使役にでた見返りに、コーリヤンや豆粕の支給を受け、各戸別に極少量の配給があった。飲み水は一升瓶を下げて、監視の下に川へ汲みに行く。洗濯も同様である。貴重な水やコーリヤンを飯盒に入れて各戸毎に石を組み、拾い集めた木切れ板切れを燃やして粥にする。口に入るものはそれだけだ。辛うじて命をつないでいた者も、ついには息絶える。老幼から毎日のように死者が出た。

ソ連軍侵攻の朝生まれた赤ん坊は出生届けを出す所がなくなつて、家族から清美きよみと名前を呼ばれていたが、

璋春に帰り着いて三日目に息を引き取った。敗戦前には延吉の避難所でミルクの配給を受けたのだが敗戦を境に境遇は一変した。四十数日の生存が奇跡だったのである。許可を受けて河川敷にある現地住民の墓地に砂を掘って埋めた。いくつかの土饅頭の間に、彼岸花が燃えるように咲いていた。

「地獄に生まれてきた清美ちゃん、満州で生まれ満州の土に還るのよ。ゆっくりお休み」

と言う母の声にほっとしたものが感じられた。握りこぶしほどの妹の顔に、両手で掬った砂をさらさらとかけ、初めて涙をこぼした。

九月、十月に死んだ者はまだ幸せだったと、やがて人々が嘆きをこめて囁くようになった。地表が凍てて埋葬できない死体が立ち木の下に山積みになっていったからだ。人間は骨と皮になり、死体を漁る野犬だけが太っていった。一日に一、二回コーリヤンの粥をすすっている人間がどうして太られよう。野犬の他に太ったのはシラミ。そしてそれを媒介にして回帰熱や発疹チフスが広がっていった。

ソ連軍の使役や現地住民に雇用されての収穫作業があるうちはよかった。十一月に入ると冬になる満州では、戸外の仕事はできない。飢えと寒さが日本人にさらに多くの死をもたらしした。

その頃、収容所に二つの新しい事態が展開されていた。一つは誇り高き日本人がついに乞食になって現地住民の門口に立つようになったこと、もう一つは、現地住民が日本人の子供を買いに収容所へやって来るようになったことである。

誰かが乞食になったと聞けば、それ以外に食べ物を手に入れる術がないわけだから、堰が切れたように動けるほどの日本人は乞食になり、多分何百人という乞食が数日の内に発生したのである。まさにボートラのように発生したのである。物珍しさと優越感で患っていた現地住民もひっきりなしにやってくる乞食の群れに悲鳴をあげ、家の戸を固く閉じるようになっていった。しかし、もう一つの子供買いの現象は日を追うにしたがって著しくなっていた。

母が乞食に出ている間、私は、死体が運ばれていく

のを見たり、けたたましい野犬の声を聞いたり、同じ年ごろの子供が泣き叫びながら連れられて行くのを見たり、その代価として金や粟、コーリヤンなどの食べ物を手渡されるのを羨ましく眺めたりしながら、空腹と寒さとシラミに立ち向かっていた。そしてひそかに、いつかは私も売られていくのだろうと思っていた。

十二月に入って、生き残りの開拓団の世話役たちは、難民収容所では越冬不可能と判断し、それぞれ個人の判断で現地住民の家に入って生きる手立てを考え、十二月十日までに身の振り方を決めて届け出ることという、解団宣言を言い渡したのである。

他の開拓団ではまとまって炭坑に就職するという方法がとられたが、和良開拓団では、炭坑の就労条件が悪く、栄養失調の体で作業に従事するのは死をはやめるだけ、と炭坑入りを見合わせ、前述の越冬策がとられた。この判断は正しかった。他団では炭坑で多くの犠牲者を出してから、最終的には私たちと同じ道を通ることになったということである。

敗戦前のよしみを頼ったり、子供を売った先を頼っ

たりと、かつてこの国に君臨した日本人という誇りを捨て、内地帰還の日まで命一つを守って待つことになった。

私の家は、土地に馴染みの父が出征したまま、便りもないうちに避難、敗戦となり、母は望まない満州行きということもあつて現地住民と溶け合うことなく渡満一年を過ごしての現状である。我が家の側房の朝鮮人一家のKは、父も彼を重用していたし、私たちの避難の際に「奥さん大変なことになりました。大丈夫、わたし、この家守ります」と殊勝なことを言っておきながら、いち早く我が家の家財道具などを持ち去ったという話で、なまじ現地住民の中では知識階級であるゆえに、己れの行動を後ろめたくさせているのか、私たちの前に出るのを避けているらしい。母と私が訪ねたら、「日本は負けたのだから」と、ことさら居丈高に言い放ち、我が家の家財道具の中に埋まっていた。Kを頼ることはできない。しかし、K以外に顔見知りの現地住民はいない。いよいよ子供を手放さなければならぬかと、解団宣言が出てから母は思い悩むので

ある。

兄が酷く咳き込むようになった。熱もある。母が乞食に出て貰ってきたマントウの底板、(大豆とトウモロコシの粉を練り、大鍋の周囲に貼りつけ、鍋底に水を少し入れて蒸し焼きにする現地住民の常食のマントウ。鍋に貼りついて焦げた部分)をかじることもしなくなつた。とろとろとしている。赤ん坊の清美の死以来、奇跡のように保たれていた我が家の命がまた一つ消えるかもしれない。母は何の方策もないまま、一人二人と親の手を離れていく多くの子供たちを見ていた。「子供を頼んだよ」といった父の声が絶えず聞こえ、自分の命があるかぎり手放したくないと思いつづけたと、母は手記に極寒の収容所での思いを綴っている。

身の振り方を届け出る期限の十二月十日があつた五日になつた日、和良開拓団の世話役の人が思わぬ話を持ってきた。母を後妻に欲しいという満州人の老人が現れたという。話を聞いてみると母には思い当たる人があつた。

琿春に帰りついて一か月ほど経つた頃、多くの日本

人が収穫期の現地住民の農作業に雇われて収容所を離れたことがあつた。朝鮮人青年同盟の監視も、私たちの恭順ぶりを見て心配が薄らいだのか、当初ほど厳しくはなくなつていた。農家に人手の必要もあつたのだろう、職探しは大目にみられていた。母が雇われた農家の主人はやさしい人で、収容所に子供を残してきていると話すと、連れてくるようにと、わざわざ牛車を仕立ててくれた。主人の父親という老人が牛を操り、四キロほど離れた琿春の収容所まで私たちを迎えに来てくれた。老人はその家に同居しているのではなく、少し離れた部落の中心地で日曜雑貨の店を出しているというこゝで、一週間後に仕事が終わつて帰るときに知つた。

農家の主人は、子供たちの食費を引かれるかもしれないと思つていた母の常識を超えた人物で、約束どおりの日当を払ってくれ、その上、老父に琿春まで送らせるといった配慮を見せた。母は、満州では日本人が何かと難癖をつけてマーチョ代を値切つたり踏み倒したりするという話を聞いていたので、約束どおりの日

当を押し戴いたという。

さて、その彈春への途中、ある大きな建物の前で牛車が停まった。老人は建物の中から一人の若い男を伴って出てきた。彼は一週間前職探しをしている母たち数人に声をかけ、仕事を斡旋してくれた日本語の話せる人だった。その男が通訳をしてくれて、老人が母に何事か話があるという。

その建物は老人の物で、以前は現地住民の村公署(村役場)に使用されていたが、日本の敗戦後、満州国の村公署へ現地住民の村公署が移され、空き家となって老人に返還されたので、彼は雑貨店をやりだしたということだった。

「老人が言っています。これからあんな収容所へ帰ってもすぐに寒くなつてとても冬は越せない。老人とここで共同生活しないか、と提案しています」

「共同生活ってどういうことですか」

「老人は三年前に奥さん亡くしてさみしいといまます。つまり、この家で老人の奥さんすることです」

「冗談じゃありませんよ。わたしには兵隊に行つて

いる主人があります。いかに落ちぶれたとはいえ、日本の女、二夫にまみえる者など一人もない！ 見損なわないでもらいたい」

「兵隊から帰ってきたら奥さんを返すと言っています。あんな収容所では子供たちが可哀相。この家なら暖かいし、食べ物もあると言っています」

「親切なご老人と思つていたのに、そんな魂胆があるのなら、送つていただかなくても結構です。歩いて帰ります」と母はすつかり腹を立てて、私たちに牛車から降りるようにいった。しかし、老人はそのままそのままというように手振りで押さえ、話を打ち切つて、ここにこしながら私たちを彈春の収容所まで送つてくれた。

世話役がもたらした後妻話はどうやらあの時の老人らしい。夫が帰ってきたら返すところでも強調したとか。民族によつて違う倫理感に、話を聞いた世話役たちも笑ってしまったという。解団宣言が出たとはいつても、かつての団長の妻である母にそんな話を勧めるわけにもいかず、笑い話のつもりで話しに来たらしい。

母は僅か五十日ほど前のあの元気を遠い思いで振り返った。「あんな収容所では冬は越せない」といった老人の言葉が現実になっている。冬を越すどころか、子供の命がすでに風前の灯火になっている。買って育て娘にすれば結納金の入る女の子はともかく、男の子は買手がすくない。まして病気の男の子など見向きもしない。歓迎されない男の子を女の子と抱き合わせで手放すのも親心で、母もいつかはと覚悟しながら、一日一日を乞食で命をつないできた。

笑い話にして世話役が帰った後、母は、子供を一人ずつ売るのではなく、かの老人に自分を売って、三人の子供を自分の手で護るといふ道があることに気がついた。「子供を頼む」と言つて開拓団を後にした父の願いを果たすにはその道しかないと思へたのだ。三日後にもう一度返事を聞きに来るといふ老人に、自分を売ろうと決断した。

一 病気の長男を直ちに医者にかけて直してくれること。

二 三人の子供は必ず自分の側に置いて育ててくれ

ること。

三 日本への引き揚げが始まったら、速やかに帰国させてくれること。

この三条件をのんでくれたなら老人の申し出を受けようと決心した。

だが、しかし、売るといふことは、後妻にと望んでいる老人の下に、生身の体を投げ出すことなのだといふ現実を思うと、一条の光に思われたその道が、修羅の道に変わっていく。熱の高い兄を両手に抱きながら三日間を母は悶々の思いで過ごした。

「お母さん、ぼく、病気になって、ごめんね」喘ぎつつ詫げる殺。

夫が最も期待をかけた殺。子供にこんな思いをさせてはならないと、わたしは決断のぐらつきだした自分を叱った。

「あなた、この決断は間違っていますか。あなたを裏切ることですか、あなたの期待に応えられない。この決断は間違っていますか、あなた答えてください」

十二月八日の朝、殺は明け方激しく咳き、苦しそう

だった。外では風が鳴っていた。

逡巡しながらどこにいるのかわからない、でも、どこかに生きているはずの父に向かって血を吐くような呼びかけをする母。七歳の私は母の気持ちを察することもなくその庇護を受けてきた。長じて母の手記のこの件を読むとき、女の、母の心中に涙する。

老人が母の提示した条件を受け入れ、私たちは老人の迎への牛車に乗り、小雪の舞う中を收容所を後にしたのである。四年前のその日は、真珠湾を奇襲して太平洋戦争の火蓋が切って落とされた日だった。戦争の拡大に不安を覚えながら、緒戦の成果に国中がわいた日だった。母はこの日を大澤五三の妻、きぬの命日と心に刻んで、日本人が四等国民と蔑んできた満州人のところへ嫁していったのである。

無知文盲の満人とみなしていた老人は、しかし誠実な人であった。兄の熱が高いことに驚き、その足で医者の門を叩いてくれた。あと数日遅ければ手遅れになったであろうという漢方医の診断だった。母も医者が見兼ねて薬を処方するほどに衰弱していた。老人の家

に着いた母は昏睡状態に陥って二日間眠り続けた。

老人の家の一部をかの日本語のできる若者が借りて住んでいたのも、私たちにとって好都合だった。彼には妻と一歳の男の子があった。私たちは彼を家庭教師のようにして、日常に必要な満語を覚えていった。

難民暮らしの四か月を経て不潔に対する嫌悪感が慣らされているとはいえ、文化の違いは戸惑うばかりであった。家の中でひっきりなしに唾を吐き、痰を吐く習性。便所のない暮らし、老人の家にはかつて役所だった関係で便所があるにはあった。しかし、四カ月前から、つまり敗戦後は汲み取りを命じる者がいないので、溜まりに溜まってしかもそれが凍り付いて山になって競り上がってきていて、用が足せないのだ。母はまずその糞便の始末に金槌を振るわなければならなかった。

老人はもともと親日派だったという。満州国時代、村の配給係をしていたといい、その辺りでは比較的裕福な人だった。「日本人は急にあんなことになって気の毒だ」と同情を寄せた。憧れていた日本人の女を妻

にすることができた老人の喜びは格別だったにちがいない。子供たちを可愛がつてくれ、母を頼ってくる日本人たちの身の振り方の相談に乗ったり、乞食の日本人にも必ず、何か恵んでやれ、と母に言った。

そうした日本人の情報によれば、もはや収容所で暮らすのは不可能で、多くの女が妾になって収容所を出たという。母の決断が数日早かったので、人々より条件のよい家庭に子供連れで入ることができたのである。子供を一人ずつ売った挙句に自分を売った母親、ソ連兵の毒牙から必死に守ったまだいたいけな少女を第三婦人に売って養われている親、夫を兄と偽って妾になって養う夫婦者、と日本人は辛い辛い生を生きただのである。

老人はそんな母の苦悩を知る由もなく、単純に周りの人に母を自慢して見せたがった。母にとつては生き恥をさらすという苦痛以外の何物でもないのだが、国家という後ろ盾を失った人間の哀れをかみしめた数か月であった。この屈辱の生を母は短歌に詠んでいる。

いつの日か巡り合えば潔く子等を渡して

死なんとぞ思う

内地へ三人の子を連れ帰り父に再会した時が、その時こそが屈辱の生から解放たれる時と、自身に言い聞かせての日々だったのだ。

老人は母に「兵隊からお前の夫が帰ってきたら、少しぐらいは畑を分けてやる。(朝鮮人は水田を耕作するが、満州族はほとんど畑作)しかし、それだけでは食べていかれない。穀には手に職をつけさせたほうがいい。お前の夫がこのまま帰らないときは、いつまでもこの家にいればいいが、自分は年寄りだから早く死ぬ。そしたら穀がお前や妹を養わなくてはならない。仕立て職人になるといい」といい、病の癒えた兄を璋春街の自分の息子の店に住み込ませた。長くこの地に留まるつもりのない母は、兄を住み込みで修業に出すのは気が進まなかったが、老人には善意に報いなければならぬという気にさせる寛い心があった。

再び八月が巡ってきた。内地引き揚げの報せはない。祖国は開拓団民を見捨てたままどうしたというのか。信じていた〈御国〉とはこんなに薄情なものなのか。

このままこの地で朽ち果てるのであろうか。いや、祖国はそんな薄情な人間の集まりではない。四等国民と蔑んできたこの国の人間でさえ、救いの手を差し伸べてくれる人がいるのだ。東洋の盟主を自負した日本が、自国の民を棄てるなどということがあろうか。自問自答しながら、敗戦から再びの夏が過ぎていく。

その日はもう九月に入っていた。カレンダーがあるとか、新聞が来て新しい日が始まるというような文化はここにはなかったが、内地への帰還だけを待ち望む者は、心の中の日めくりを日の出とともに一日一日、確実にめくっていた。

朗報はまさしくその日の出とともにやってきたのである。母が朝日に向かって柏手を打っているとき、「日本人ですか、引き揚げです。今日の正午に琿春を出発です」という声があった。

琿春街にある日本人会から派遣されたという若者の紅潮した顔。あまりの唐突さに信じられないような朗報である。

まだ寝ていた老人は母の報せに飛び起きた。

「今日の正午に、デマではないか、そんな話は聞いていないぞ。騙して炭坑へでも連れて行って働かせるのじゃないか」

「騙されたっていい。琿春の日本人は一人残らず引き揚げるのだそうだから、騙されたってついていく」「そうか、日本にはお前の父や母がいるのだからな」と、老人は呟いた。

彼は沈んだ表情ながらも、倉庫から大豆の袋を持ってきた。その二斗ほどの大豆を全部炒り豆にして道中の食糧に持たせてくれた。さらに、なにがしかの金を旅費として渡してくれたのである。

彼は約束を守った。手に入れた女を放すまいとする主人に阻まれて、引き揚げるのができなかった婦人があるなかで、私たちは実に大人の風格をもった現地住民に拾われたのである。日本人会では、親の手を離れた子供たちも、できるだけ連れ戻してくるよう指令をだしたという。だが、ここでも子供を隠して渡さない家があった。

こうした一部の残留者を含めて、満州の土になった

和良開拓団民は、全体の四十五%に及んだ。シベリアの抑留者の死亡率がおよそ十%であることから比較して、開拓団の置かれた惨状がいかに酷かったかを物語る数字である。

満州各地は満州国崩壊後、国府軍と八路軍（共産軍）の内戦状態が続き、琿春地区は八路軍の勢力範囲になっていた。昭和二十一年五月より、南滿から徐々に日本人が引き揚げていることなど、共産圏にはまったく知らされていなかった。国府軍の申し入れで八路軍側も一時停戦して、南東滿の日本人の引き揚げに協力したということがわかったのは、吉林辺りまで来てからであった。

琿春を九月一日の正午過ぎに出発した一団は、琿春の西にある密江峠で最初の一夜を豪雨の中で過ごした。琿春から図們までの鉄道はレールから枕木までごとごとくソ連軍によって撤収されていて、およそ百キロを歩かなければならなかったのだ。最初の一夜にして落命者が出た。病が重く帰国は無理と承知しながら、とり残されるよりはと、一団についてきたのだという。

内地の人間に望郷のこの思いが分かるだろうか。

図們で帰国団が編成され貨車に乗って延吉へ向かった。一年前の九月、延吉の学校を退去させられた難民の群れが、延々と図們を通って琿春を目指したのだった。同じ道を帰国の途にある。辛く苦しい道ながら前途には祖国という光がある。牛馬輸送用の貨車に詰め込まれ、悪臭と炎熱にくらくらとしそうな頭をきつと持ち上げて、祖国の山河を心に描いた。

延吉と吉林の間の長白山脈の中ほどで、一行は列車から降ろされて山中を歩かされた。後にそこが国府軍と八路軍の勢力境界線だと知った。私は貨車の悪臭と熱気から解放され清澄な山の大きに触れて生き返ったような心地がしたことをはつきりと覚えていた。

再び京図線に乗り、吉林駅で降ろされた。どのような経路と旅程で内地に引き揚げられるのかまったく分からなかった。私たちには（行き当たりばったり）というような印象だった。貨車に乗せられたかと思うと、そのまま走らずに降ろされたり、停まった貨車の中で日を過ごしたり、水や食糧の支給はなく、老人の持た

せてくれた炒り豆をかじってじつと耐えた。

新京、奉天、錦州と各地で数日から十数日抑留された。その間、学校や倉庫などに収容された乗船までのおよそ五十日間、飢えと炎暑、肉体的な苦しみは一年前のソ連軍の侵攻から敗戦、さらに棄民となつて彷徨つた帰郷の日々と同じものであった。しかし、この苦しみの末に日本という安住の地がある。(祖国)が私たちの心の支えになつた。

この難民暮らしの間に亡くなった人が数多くある。祖国の土を踏んで死にたいという思いが果たせなかつた無念さ。ここまで来て現地の人に渡された子供もいた。

コロ島から米船に乗つて博多に着いた。検疫で手間取り、DDTを真っ白にまぶされたのは、多くの引揚者と同じである。

国鉄岐阜駅に降り立ったのは昭和二十一年十月二十六日だった。和良村長らの出迎えを受けて、ようやく故郷に帰りついたという実感がわいた。飛騨金山で汽車を降り、そこからトラックに乗つて、満州開拓の使

命を担つて村を後にした和良村分村開拓団民は、やつれ果て、土色の体にシラミを土産にして帰り着いた。

満州のシラミは筋金入りで、一度ぐらいのDDTではびくともしなかつたのである。トラックを降りた私たちはかつて父が理事をしていた産業組合の二階に入り、五目ご飯のおにぎりをふるまわれた。何というおいしさだろう、としみじみ故郷のありがたさをかみしめた。敗戦のその日から避難民収容所で支給されるおにぎりが、白米からコーリヤンに変わったというあの日のことがいまさらながら思い出された。

だがしかし、故郷にも安住の地はなかつたという現実を私は記さねばならない。

極少数の人は和良村に家屋を残して満州に渡つていった。それ以外の者は親類を頼るか、村が一時的に用意した、稚蚕飼育所、隔離病舎付属建物などへ身を寄せた。村からは援助金が支給され、生活保護法が適用された。村有林が提供され、昭和二十六年ごろまで木炭製造に従事した世帯が十数家族あつた。そうした人たちも含めて、新たに北海道や岐阜県内の奥美濃や東濃

地方に開拓民として再入植し、孤児となって帰村した者もやがて学齢を終えて村を後にし、今も和良村に留まるのは、十人ほどである。

私たち母子も村に留まることのできなかつたケースである。

渡満に際して、父は最終的に財産を処分していた。満州に渡ればその日から洋々たる農業が営まれるという宣伝がなされていたが、実際は一、二年は手持ちの金でやり繰りしなければならなかつたのである。団長に推され、家族を呼び寄せた段階で、再び村には帰らない覚悟をしたのであろう。

父の身寄りとしては、その頃東京から疎開していた伯父一家がいたが、田畑を持たない伯父にとつて、とつてい母子四人の面倒を見る余裕はなかつたであろう。母は止むなく生家を頼つた。私たちは伯父の家に二泊して、牛道村に向かつた。

母は、中谷庄之助、ちゑ夫婦の四女で、三人の姉と妹は稼ぎ、弟二人は昭和十九年六月と九月に、相次いで戦死していた。跡取りを亡くした祖父母は、長女と

三女の嫁ぎ先から男女の孫を中谷家に入籍させて、将来二人を結婚させて跡を継がせる積もりでいた。そこへ諦めていた私たちが生きて帰つてきたのである。祖父母は母の四子出産が八月九日であることを、母からの手紙で知つていた。その同じ日のソ連軍の満州侵攻の報に心を痛め、その後の情報のないまま、すでに一家は亡くなったものと、寺に永代供養を頼み、日夜冥福を祈つていたという。一瞬、幽霊ではないかと思つたらしい。

二人は収獲した薩摩芋を俵に詰めているところだつた。

「お父つつあま」「お祖父さん」「お祖母さん」私たちは口々に叫んだ。

「きぬか」というなり手にしていた俵を放り出した祖父と祖母。

抱き合つて喜ぶ祖父と母。祖父は「まず上がれ」と言つた。祖母は「いんにゃ。湯を沸かすまで外で待つておいで」と言つた。祖母の目にはシラミの行列が見えたに違いない。

祖父母は、二年前に内地を發つ時連れていった子供たちが一人も欠けずに帰ってきたことを大いに喜んだ。ただ、応召した父が多分シベリアへ送られたであろうと、多くの在滿の兵隊たちの運命を嘆いた。

父と結婚するまでこの村で教職に就いていた母の帰国がたちまちニュースとして村を走ったのだろう。三日後に、村役場から人が来て、来月から發足する農地委員会の事務職員に母を採用したいという。「急なことです、ご苦勞されたいうことで優先的な計らいでして」との話だった。

母はこうして十一月三日から役場に勤め出した。「ああ、今日は明治節だなあ」と思いながら、役場へ初出勤した。ふるさとの温かさを秋の日に重ねたという。

いま私は母の生きざまを思う。

はるばる故郷に帰りついて、せめて一か月ぐらいはのんびりと父母の懐に羽を休めたいと思うのが人情だろうし、それが許されないという環境でもなかった。にもかかわらず、人の好意に依えて一週間も経たぬうちに勤めだした母。満州でも、目には見えない大きな

力に助けられて母はいくつかのピンチを切り抜けてきた。極限状態に立たされたときどう対処するかで、人の運命は大きくかわる。たとえ幸運だとしても、果敢に立ち向かわなければ幸運にも身放されてしまうのだ。

母は自分にも甘えを許さなかったが子供たちにも立場をはっきりと認識させた。

祖父は父が復員するまで、面倒を見るといつてくれたのだが、その復員した父が妻の実家にはかり世話になったという肩身の狭い思いを抱くことへの配慮から、三人の子供のうち一人だけでも父の実家で面倒を見てほしいと、和良村の伯父に掛け合った。生家を継ぐ甥や姪に対しても、母は一度に四人増える家計の負担をおもたせ慮ったのはいうまでもないことだろう。三人の子供のうち私が伯父の世話になることになった。祖父は私を不憫がり、「せめて、正月明けの三学期からにしたらいではないか」といつてくれたが、母は一日も早く就学させたいと、伯父との手紙のやりとりで話が着くと、十二月初めに私を連れて和良村にでかけ

た。

当時は交通の便も悪く、一日がかりで行き来する距離を、母は二学期の修了と同時に私を迎えに来てくれた。わずか二十日あまりの二学期だったから、交通費だけでももつたいないと人は言うかもしれない。

伯父の家には子供はなく、伯母と祖母の三人暮らしだったが、疎開者には母の生家ほどのゆとりはなかった。私には春先から伯父が飼育している兎の餌摘みという仕事を与えられ、なかなかたまらない籠の中の若草に、泣きたい思いの毎日だった。そんなとき伯父は「お前のお父ちゃんも、シベリアに連れていかれて、今頃一生懸命働いているぞ。ソ連じゃ『働かざる者、食うべからず』っていうそうだからな」と、籠一杯というノルマの達成を厳命した。青菜の混じったお粥を、伯母のささくれだった手から子供茶わんに入れて渡されるるとき、シベリアとかにいる父にも、こうして食べるものが渡されているのだろうか、難民収容所でのひもじさを思った。

この伯父の家に、私は八か月世話になったが、夏休

みになって母が迎えに来て牛道村にもどったのを機会に、「以後はそちらで」という伯父からの手紙がきた。扱いにくい子供だったのかもしれない。あるいは、再び父が和良村に帰ることはあるまいという予感が伯父にはあったのかも知れない。

父の戦死の公報が入ったのは、昭和二十三年の二月だった。

▲陸軍上等兵、大澤五三、昭和二十一年一月二十八日、ソ連邦ロストフカ地区ネムロスカヤ収容所に於いて、栄養失調症により戦病死とあった。

母の生家を継ぐ予定のいとこ達は、この公報を前にして、母に復籍を勧めた。自分たちは若いからどのようにも身が立つと、母にこの家の後継ぎを譲ってくれたのである。多くの引揚者たちが祖国に辿り着いても身の寄せどころがなかった苦難を思えば、幸せだったという他はない。それでも父のいない悲しさを、折々に感じて生きてきた。

大きな時代の波に翻弄された庶民、このような苦難の道を、再び後の世の人々に歩ませてはならないと、

國境を越えた民族の英知が、この三角地帯にやすらぎと豊さをもたらすことを祈りながら、豆満江開発のニュースを見ている。

執筆者の横顔

玉田さんは、昭和十三年、岐阜県和良村で生れ、父親は大沢五三氏で、村の産業組合理事、村役場の経済担当の職員としてつとめておられた。同十四年に和良村は農林省、岐阜県の指導をうけて満州開拓分村計画をたてていたのが認められ、和良村長は、大沢氏を分村開拓団の経理指導員に任命したので、同十六年、間島省琿春県内の和良開拓八十一戸の三〇四人とともに入植したのである。

同十九年、推されて団長に就任した大沢氏は、一人婦国して家族妻、長男毅、長女澄子、妹明子の五人で渡満、当時、澄子さんは六歳である。幼児から長ずるに及んで個性の強い感情豊か、わがままのところがあったが、思いやりの深い思索家である。

父親が複雑多岐にわたる難事業の団運営に日夜骨身を削つての大多忙の姿、異民族の社会に入って育児に

家庭をきり盛りしている母親の繁忙ぶりを、子供心に澄子さんは容易なことでないと感じていた。

広漠たる満州平野に色とりどりの草木の花咲く春、赤日夕陽の太陽、香りたかい鈴蘭の花をつんで楽しんで小学校に入った年に父親は昭和二十年六月、召集となって出征した、しかもこれが父親と永久の別れとなつた。

この二十年の八月には突如、ソ連軍の空爆、地上の戦車で開拓部落は阿鼻叫喚、父親なき澄子さんの家庭は母親の心痛、容易でない、爾来、五十余日逃避行であり正に生き地獄の日常である。

その間、終始ソ連軍の来襲、発砲で死亡者続出、野宿している中にソ連兵が入ってきて強姦、悲鳴があがるのは至るところで惹起した、七歳の小児が強姦という恐ろしいのを始めてみたのである。持っている物は凡てが掠奪され、全く着のみ着のまま、シラミがわく、伝染病に栄養失調になやまされて死亡者続出。

母は子供三人の犠牲となって私どもの生命を守つて下さつた等々の行動は正に南朝の烈婦、楠正成の妻、

正行の母と等しく、これに勝るとも劣らぬ親子のきずなである。七歳の子供心にも澄子さんの孝心、母親の心事、夫大沢五三氏を思う心、わが子を殺さず、死なせずに引きあげてくれた、誰か感動せざるものがあるうか。

澄子さんは、自著「大地の風」の売上げ資金で残留孤児教育資金とする基金を設立して日中友好の楔として精進している崇高な運動に敬意と感謝を表する。

(社引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

渡満、召集、敗戦、引き揚げまでの苦難

北海道 神田 雅夫

大望を抱き満州へ

私は若い時から、この狭い日本より支那へ渡って活路を開くことを念願していた。

高専を卒業して私を満州へ行かせて欲しいと養父母に申し出た。

さあ大変！実は私は養子なのである。

私を一人前にして家業を継がせるため学業が終わるのを一日千秋の思いで待っていたのであった。雅夫は気が狂ったと親族会議を開く始末、何も気がおかしくなった訳ではない。私の持論をよく説明し、不承々々納得を得たのである。

それでは資金を持って行けという、私は断固として断った。親の資金を持って行って、成功しても親のお陰、失敗すれば親の財産を潰した息子といわれるのは必定、資金はいらないと、やっと説き伏せ旅費として三百六十円貰って旅立った。

先ずは当時、満州と朝鮮の国境近くの満浦鎮で間組が世界一のダムを建設することと木材を納入すべく現場に乗り込んだが、現地には山はあるが用材になるような木材は一本も無い。

これだけの大工事の用材はどうするのかと調査の結果、安東から鴨綠江を船で逆送すること、これで